

ブラジル特報



No.1648
2019年1月号

あの町この町
ヴィトリア Vitoria



特集「ブラジル新時代」

- ・いちかばちかのボルソナーロ政権
- ・統一選挙を巡るいくつかのファクト
- ・ボルソナーロ政権を占う～期待とチャレンジ
- ・外交史からみた新政権の課題と問題

新規会員募集中!
詳しくは P21 をご覧ください。



 一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

360° business innovation.



Photographer: Ricardo Teles / Vale



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。
ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

[Business innovation-2]

水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとつときを。
Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。
これからも豊かな食文化をお届けする。



MITSUI & CO.

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

目次

- あの町この町
ヴィトリア [沼田行雄] 3
- ブラジル・ナウ
未知数への期待と課題 [堀坂浩太郎] 5
- 【特集】ブラジル新時代
いちかばちかのボルソナー口政権
[沢田太陽] 6
- 【特集】ブラジル新時代
統一選挙(一次投票10月7日、決選投票10月28日)を巡る
いくつかのファクト [『ブラジル特報』編集部] 7
- 【特集】ブラジル新時代
ボルソナー口政権をうかう~期待とチャレンジ
[村田俊典] 8
- 【特集】ブラジル新時代
外交史からみた新政権の課題と問題
[子安昭子] 10
- ブラジル現地報告
魚食啓発ワークショップにおける
日・伯・アフリカ交流の試み [佐藤安紀子] 12
- 連載・日系企業シリーズ第56回
三井住友海上ブラジル、路傍の石 [長野昌幸] 13
- 連載・ビジネス法務の肝
ブラジルからの撤退 [柏 健吾] 14
- 連載・税務の働どころ
ブラジルにおける個人所得税
[ジャンニ・ゴウラト/寺出俊也] 15
- エッセイ
バジュバー論争 [且 敬介] 16
- ウーマン・アイ
キスの洗礼 [西林喜久子] 17
- ジャーナリストの旅路
講演会「ブラジルと日系人」を終えて
[中島慎一郎] 17
- 連載・文化評論
マウリシオ・デ・ソウザと手塚治虫
手塚プロとのコラボ新展開そして在日ブラジル人子弟への視線
[岸和田仁] 18
- 最近のブラジル政治経済事情 19
- 新刊書・新盤紹介 20
- 連載・びっくり豆知識 カロス・ゴーン逮捕、悪いのはカネだ 20
- 協会からのお知らせ 21



写真=永武ひかる
「表紙のひとつこと」
「リオのセントロで出くわした路上の芸人たち。中には、ピエロやシスター、路地の糞害を皮肉る衣装の人も。人目を引く姿にコミカルな身ぶり手ぶりで、瞬く間に街角を劇場に変えると、次のストリートへと舞台を移していった。」
(永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともたち3 ブラジル」(偕成社)等。www.hikarunagatake.com)

あの町、
この町

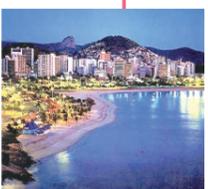
ヴィトリア Vitoria

ミナス、リオ、バイーアの3州に接するエスピリトサント州の州都ヴィトリアは、リオの北東、約500キロに位置し、リトル・リオとも称せられる、人口約35万人の風光明媚で美しい港町である。対岸のヴィラ・ヴェーリャの丘にたつ白亜のペーニャ修道院は、さながらコルコバードのキリスト像であり、コバカバーナに準えられるのがカンプリの美しいビーチと言ったところ。また、2015年、国連開発計画は、ヴィトリアをブラジル州都の中で二番目に「生活しやすい都市」に挙げた。



歴史は古く、1535年、ポルトガル国王から派遣されたカピタニア領主、ヴァスコ・コウチーニョが到着、原住民との長い戦いの末、その名の通り勝利し、1551年9月8日に今のヴィトリアが誕生した。レシフェやサルバドールと同じくらい古い州都である。

ヴィトリアは、19世紀以降、イタリア、ドイツ系移民の流入もあり、コーヒーの積出港として栄え、その後、1942年にヴィトリアーミナス鉄道が完成、イタピラ鉱山から鉄鉱石が運び出されるようになり、更に、1966年にツパロン港が開港し、リオドセ(現ヴァーレ)社の国際的な輸出港として大きく発展を遂げた。筆者がエスピリトサント連邦大に留学していた1976~78年頃は、多くの日伯ナショナルプロジェクトが形成された第一次ブラジルブームと言われた時期で、ヴィトリアでも、日伊共同プロジェクトであるツパロン製鉄所の建設黎明期で、製鉄用ペレット生産のNIBRASCO、州北部でユーカリ植林事業を展開するFLONIBRAなど日伯合弁事業が立ち上がり、活気に満ち溢れていた。当時は、日本人駐在員も少なく、日系社会も形成されていなかったなか、好奇心に富むカピチャーバ達が温かく受け入れてくれたことを、40年たった今でも懐かしく思い出す。



カピチャーバと言えば、ブラジルの代表的な魚介類の土鍋料理としてムケカがあるが、ヴィトリアのムケカ・カピチャーバは、ココナツミルクとデンドエ油を使うバイーア風のこってりではなく、コロラウという食紅を使い、あっさりした日本人にも親しめる味なので、お勧めしたい。また、意外に知られていないが、ブラジルを代表するチョコレートメーカー GAROTO の本社工場もヴィトリア郊外にある。



沼田行雄(協会理事、前在トンガ大使)



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で欠かせないのがポルトガル語です。BrAsia(ブレイジア)では赴任前と赴任後の語学研修を提供しています。「講師任せにしない」現地に精通したスタッフも学習をサポートします。

BrAsia(ブレイジア)の研修プログラム

BrAsia(ブレイジア)
代表者 小川善久



1987年大阪外国語大学(現・大阪大学)卒業。株式会社リクルートを経て2005年中国語の研修会社「漢和塾」を設立。2014年ポルトガル語の研修部門をBrAsia(ブレイジア)を設立。最低年1回ブラジル現地出張しブラジルの今を体感中! またZENKYU(ステージネーム)として音楽活動も。日本のみならずブラジル現地で自作の曲を披露!
参考)YouTube: ZENKYU CHANNEL

■赴任前ブラジル・ポルトガル語短期語学研修 30~50時間

現地赴任前に最低限の準備を! → 独学の準備と自己紹介・タクシー移動等

※企業への講師派遣(首都圏・名古屋地区・京阪神)も可能です。

■ブラジル異文化概論&マネジメント講座 半日~1日

ブラジルの文化・ビジネスの課題を解決! → マネジメントや異文化理解等

■サンパウロ・ポルトアレグレ現地短期語学研修 1~6か月

キャンパスライフは不要! → マンツーマンで語学力を一気に向上

未知数への期待と課題

言葉に驚かされずに「深堀を」

「ブラジルのトランプ」「極右」そして「ポピュリズム」—ジャイル・ボルソナーロ次期ブラジル大統領選出翌日の内外の新聞にはお決まりの過激な言葉が舞った。当の新大統領が喜んだとすればブランドの確立といえるが、レッテル貼りの側面は否めない。短い言葉が乱舞するSNS(ソーシャル・メディア)におもねったのか、それともマスメディアの語彙が貧弱になった表れか。離日直前の当協会主催の講演でアンドレ・コヘア駐日大使がextraordinaryな、これまでの状況から断絶するようなことが起こった選挙結果だったと述べるとともに、ブラジルの変化を「深堀して欲しい」と語ったのは、表面的な現象に流されるのではなく、これがこの国にとってどのような意味合いをもつ現象であるのか、じっくり観察して欲しいとの願いからであったであろう。

選挙キャンペーンの熱した言動から、次期大統領には冒頭の“レッテル”的な側面が無いわけではない。しかし、これらの3つの言葉をもって浮かび上がる大統領像と新政権像は、実際のところ実態とかなりかけ離れたものであろう。「ブラジルのトランプ」ひとつをとっても、米トランプ大統領の誕生を後押しした「ラストベルト」と、ボルソナーロ新大統領の登場に期待をかけた層とはおよそ異なっている。前者が社会の変化から取り残された層だとすれば、後者は治安悪化や汚職蔓延に業を煮やして旧政治勢力に「ノー」を突きつけ、27年間下院議員でありながら国政の場にほとんど参加してこなかった“新顔”ボルソナーロ氏に局面転換を託した人たちであった。

それだけに新政権には未知数の部分が多い。しかしながら思い返せば、ブラジルは何度も未知数にかけ政治転換を試みてきた国でもある。ボロソナーロ氏と同様に新星のように現れた1990年のコロール大統領、左派政権誕生に市場が怯えた2003年のルーラ政権といくつも例を挙げることができる。そもそも1985年の軍政から民政への体制転換も、就任直前に本命の選出大統領タンクレード・ネーヴェスが死去し、「軍政に逆戻りか」の噂が流れる中でのスタートであった。こうした経験を積み重ね民主ブラジルは耐性をつけてきた側面もある。政権を確実にしてからは、ボル

ソナーロ氏の発言も少しずつではあるが、1988年憲法を尊重し、三権間の協働を図っていきたくないと軌道修正を始めている。

カギ握る政権発足前後の8カ月

読者の目に本稿が届くのは2019年年初である。1月1日に新政権が発足しているはずだが、これに先立つ選挙後の2カ月間、テメル前政権と新政権の間で新旧官房長をヘッドとした移行委員会が設置され、予算を含めた政策のすり合わせが行われている。2003年のカルドーゾ政権(ブラジル社会民主党PSDB)からルーラ政権(労働者党PT)への橋渡しがスムーズに行われたのは移行委員会の存在によるところが大きい。選挙の勝敗によって、政府首班が即変わるわが国とは大きく異なる点である。

加えて新議会の発足は2月初め。最高裁の休暇明けもこの頃である。この1カ月が、発足政権にとって足慣らしの期間といえる。そして3月初旬のカーニバルで緊張をほぐした後、本格的な政治日程が始まる。当然、年金改革や財政健全化、景気振興といった公約実現の力量や、はたまた下院第一党の勢力を保った労働者党など野党の突き上げ、法制優先の最高裁との駆け引きなど、現実が頭をもたげてくる。未知数への期待値が高いだけに、政権発足6か月のハネムーン期間をじっくりみていく必要があるだろう。

その際、目を配りたいのがガバナンス(統治)への姿勢である。政府内のガバナンス、三権間のガバナンス、連邦・地方間のガバナンス、市民生活のガバナンス、そして企業のガバナンスと、挙げ始めるとその対象範囲は次から次へと広がっていくが、民主化以降、さまざまな制度構築を進めてきたブラジルにとって欠けてきたのは、これらの制度を有効に働かせるガバナンスの欠如ではなかったのか。訪日時(18年2月)に日本社会の規律に好感をもったと言われるボルソナーロ新大統領の対日観を考えると、わが国官民への協力要請が増えてきそうだが、ガバナンスの“要諦”を忘れることがあってはならない。

堀坂浩太郎(上智大学名誉教授)

いちかばちかのボルソナー口政権



沢田太陽
(ニッケイ新聞記者)

2019年1月1日から「ポスト・トランプ時代」の南米では初となる極右政権、ジャイル・ボルソナー口大統領の政権がはじまる。「極右の政治家が大統領選で熱狂（と同じくらいに強い反発も）をもって迎えられる」という状況は欧米社会を驚かせましたが、そんなブラジルは2019年以降、どういう方向へ向かっていくのか。

「従来のブラジルの政治体制を打倒して始まることになるこの新政権。全く新しいものだけに「未知なるもの」への期待を膨らませている人も少なくないかもしれない。だが、10月28日の大統領選以降、現在まで行っている組閣を見るに、「その未知がさらに迷に満ちたものになった」と言わざるをえない。正直な話、少なくとも筆者にはボルソナー口氏が「政治で」何をやりたいのかわからない。ただ、わかることは「長年にわたり、踏みにじられてきた軍人のプライドを今こそ見せつけたい」。ただ、それだけだ。

ボルソナー口氏が組閣に力を入れたのは、「なぜ、そこまで」と思えるほどの軍人の閣僚起用と、「教育、外務、人権」といった、イデオロギーに関わる部門での、時代を数十年逆行させたような超保守主義の人材で固めたことだろう。彼ら閣僚にしてみたらLGBTや妊娠中絶に反対するというのは当然である上に、そこに左翼を「マルクス主義者」と呼び、彼らを廃絶したいだけにとどまらず「環境保護もマルクス主義の賜物」と呼びすでに国際的な響きも買いつけている。いくら同様の発言を、ボルソナー口氏の敬愛するトランプ氏がしたからといって、ここまで極端な真似事をあたかも社会の善でもあるかのように遂行しようとする。これが仮に教育現場に何年にわ

たり影響するようなことが起こるのなら、今後の4年ではなく、10年、20年先のブラジルの方が不安になってくるのだが。

ただ、幸いなことに、経済活動とというのは、そうした極端な思想の浸透とは関係なしに動くもの。事実、ボルソナー口政権で経済を動かすのは、かねてから「その方面は明るくない」と公言しているボルソナー口氏自身ではなく、新自由主義経済のシカゴ学派の経済学者のパウロ・ゲデス氏。ボルソナー口氏のこの人選がブラジルの企業家や国際的な財界に受けがよかったことが大統領選当選につながったほどにボルソナー口氏には重要な存在だ。基本、自分が得意としない分野は官僚に実質、よく言えば「アウトソーシング」、悪く言えば「丸投げ」しているボルソナー口氏だけに、ゲデス氏に一任すると結果は良いかもしれない。

ここでゲデス氏に期待されていることは、「緊縮財政」「早期の社会保障制度改革」「ペトロプラスをはじめとした公社の民営化」などであり、これが財界や投資家たちが期待するように上手くいけば、テメル政権下で上向きにバトンタッチされた経済状況がさらによくなるかもしれない。

だが不安も無いではない。一つはゲデス氏がどんなにアイデアを持っていても、その法案を上手く議会に通せるかどうか。ボルソナー口氏の政党、社会自由党はその半分が政治家経験がなく、残りも経験の浅い人材ばかり。加えて理想主義的に政党連立も行っていないから、議会工作で一苦勞するのはすでに予想されている。加えてゲデス氏には収賄疑惑があり捜査を受けている。これで仮に逮捕で辞任などとなると、一点、窮地に追い込まれる。ボルソナー口氏に関して言えば、

下院議員の時代から、社会保障制度に関しては賛成なのか反対なのかの一貫性がなく不明で、さらに、ただ単に「労働者党が嫌い」というだけで、すでにブラジルの最大貿易相手国となっている中国との関係を崩そうとしたり、さらに言えば、公社民営化の際の入札を嫌がっていたりするほど、経済のハンドリングに適しているとは言えない。ボルソナー口氏の口出しの機会が減れば減るほど幸運だと言えよう。

あと、ボルソナー口政権で世間が最も期待している「汚職撲滅」と「治安強化」だが、こちらの方の雲行きは早速よくない。組閣の時点で、すでに警察からの捜査経験のある人物が多く、連立を組もうと噂されている政党も大型汚職で問題になったことのある党ばかり。この点に関して言えば、ボルソナー口氏自身の過去に渡り歩いた政党や人脈を考えて「世間が思うほどきれいでない」ことは何度も報道されていたが、国民が聞かなかつたところだ。

同政権の目玉は、ラウア・ジャット作戦判事、一躍「正義のヒーロー」と国民が尊敬するセルジオ・モーロ氏が法相についたことだが、これも国民全体が喜んでいてのことではない。法相就任で少なくとも左派支持の国民は「これまでの裁きはやはり右寄りな視点によったものだったのだ」という思いを強くしているし、モーロ氏自身も早速、収賄疑惑のあるオニキス・ロレンゾーニ氏について「疑惑を認めて謝ったのだからいい」という、これまでの厳格なイメージの崩れる発言をして世間を驚かせている。これまでのピュアで実直なイメージを、ボルソナー口政権の政治家が疑惑に巻き込まれた際に客観的な立場で対応できるのか、気になるところだ。

統一選挙(一次投票10月7日、決選投票10月28日)を巡るいくつかのファクト

【ブラジル特報】編集部

(大統領選) 決選投票結果(有効得票率)

PSL(社会自由党)のボルソナー口候補: 55.13%
PT(労働者党)のアダッジ候補: 44.87%

(大統領選) 地域別に南北分断された政治地図

ブラジルは27の州で構成されるが、決選投票でアダッジ候補の得票率が50%を超えた州は11州。具体的にはノルデスチ(北東伯)全州(マラニャン、ピアウイ、セアラ、リオグランデ・ド・ノルチ、パライーバ、ペルナンブーコ、アラゴアス、セルジッペ、パイアの9州)並びに北伯のパラー州、トカンチンス州、である。このうちペルナンブーコ州の数字をみると、アダッジ66.53%、ボルソナー口33.47%であったが、ノルデスチ全体の有効得票率はアダッジ68.2%、ボルソナー口31.8%とPT(労働者党)の圧勝であった。但し、都市部の投票結果をみると、レシーフェの場合、アダッジ52.5%、ボルソナー口47.5%と拮抗しており、都市有権者のPT支持率はノルデスチ全体平均よりは15%も下回っている。

(大統領選) 前回のPT優勢から今回ボルソナー口優勢に変身した二つの州

南東部のミナスジェライス州と南部のリオグランデ・ド・スール州という二つの大票田での変化に着目したい。ミナス州は、前回(2014年)はルセフ元大統領が過半数をおさえ、州知事にはビメンテルといずれもPTが勝利したが、今回は、前回PTに投票した有権者のかなりの部分がボルソナー口へ票を投じたため、ビメンテルは再選されず(一次投票で3位となったため決選投票にも行けず)、同じくミナス州から上院議員に立候補したルセフ元大統領は、事前の楽勝予想を完全に裏切って最下位落選の憂き目を見た。リオグランデ・ド・スール州の場合も同様で、かつては州知事も州都ポルトアレグレ市長もPTがおさえ、カウンター・サミットといわれた「世界社会フォーラム」を主導したり、市民参加型予算を定着させて「労働者党の牙城」といわれた州だが、そんな面影は今や失われた。

(大統領選) 遠隔地ナショナリズム

在外ブラジル人(登録有権者数は約60万人)の投票行動はどうであったか。米国、ポルトガル、イギリス、イタリア、日本などに居住する在外ブラジル人の投票結果は、全体の有効得票率でボルソナー口71%であった。在外票田として第一位の米国に次ぐ世界で二番目の票田である日本での結果をみると、地域別のボルソナー口得票率は東京90.85%、浜松92.1%、名古屋91.5%、大泉91.6%となっている。

在外居住者のほうが本国住民よりも保守的なナショナリストになる傾向があると論じた政治学者ベネディクト・アンダーソンは、これを「遠隔地ナショナリズム」と名付けたが、今回の選挙結果はこの具体事例といえる。

(下院議員選) 一層の多党化

連邦下院議員を1議席以上獲得した政党の数は、1994年の選挙(リアルプランが成功したおかげでF・H・カルドゾ大統領が当選した年)では16であったが、今回は、30政党だ。多党林立とも小党乱立ともいえる。ちなみに下院議員定数は513名である。

(下院議員選) 獲得議席数の党別順位(上位20位まで)

① PT(労働者党)	56議席
② PSL(社会自由党)	52
③ PP(大衆党)	37
④ MDB(ブラジル民主運動)	34
⑤ PSD(民主社会党)	34
⑥ PR(共和党)	33
⑦ PSB(社会党)	32
⑧ PRB(ブラジル共和党)	30
⑨ DEM(民主党)	29
⑩ PSDB(社会民主党)	29
⑪ PDT(民主労働党)	28
⑫ SD(連帯党)	13
⑬ PODE(ポデモス党)	11
⑭ PSOL(社会主義自由党)	10
⑮ PTB(労働党)	10
⑯ PCdoB(共産党)	9
⑰ NOVO(新しい党)	8
⑱ PPS(社会主義大衆党)	8
⑲ PROS(社会秩序共和党)	8
⑳ PSC(キリスト教社会党)	8

(下院議員選) 新顔が過半数

前回2014年の統一選挙における下院議員の再選議員率は、53.22%で、初当選した新顔は46.78%であったが、今回は、新顔が53.41%で再選議員は46.59%と新旧が逆転している。

(下院議員選) 主要政党の盛衰

- ① **激減した既存政党**: テメル現大統領の与党MDB(民主運動)は、前回(2014年)の65議席から今回の34議席へ。カルドゾ元大統領のPSDB(社会民主党)は、前回の54議席から今回の29議席へ。いずれもほぼ半減となってしまった。
- ② **急伸した党**: ボルソナー口選出大統領の所属党PSL(社会自由党)は、前回の1議席から今回の52議席へ、と51議席も増やした。
- ③ **あまり減っていないPT(労働者党)**: 大統領選では敗北したPTの下院議員選挙の結果は、前回の69議席から今回の56議席へと13議席減少。但し、同党から分派したPSOL(社会主義自由党)は、前回の5議席から今回の10議席と倍増している。この部分をカウントすれば、PT下院勢力はさほどパワーダウンしてはいないとの見方もある。
- ④ **善戦したPDT(民主労働党)**: 大統領選(一次投票)で三位(得票率12.47%)となったシロ・ゴメス候補の所属党PDTはかつてルセフ元大統領も属していた党だが、今回の下院選では28議席を獲得、前回よりも8議席増と善戦した。

(州知事選) 主な政党別の選出州知事数(前回2014年⇒今回2018年)

PT(労働者党) 5⇒4、PSB(社会党) 3⇒3、MDB(民主運動) 7⇒3、PSDB(社会民主党) 3⇒3、DEM(民主党) 0⇒2
このうちPTの4知事はいずれもノルデスチ(パイア、ピアウイ、セアラ、リオグランデ・ド・ノルチ)であるが、PSDBの3知事は、サンパウロ、リオグランデ・ド・スール、マトグロソ・ド・スールの三州を押さえたので、経済力(GDP)ではブラジル全体の40%をカバーしている。また、今回選出された27州知事のうち15知事がボルソナー口支持とみなされている。

ボルソナーロ政権を占う 期待とチャレンジ

新年号が発刊される頃には、就任式も終わり、全ての閣僚も決まり新政権がスタートしている。どのような2019年になるかは不透明ながら、経済界の新大統領に対する期待も高く、14年余り続いた左派労働党政権から漸くプロビジネスの政権がスタートする。

ボルソナーロを読み解くには、まず自分がボルソナーロだったら、どうするか？という質問をしてみるのが一番わかりやすい。

アンチ労働者党 (PT) の票を取り込んで選ばれた大統領である。従って、どんなことがあっても、2022年の選挙でPTに敗北するわけにはいかない。再選は至上命題である。

この命題を軸に「ボルソナーロが貫く自身のイデオロギー (変えられないもの)」と「変えられるもの = イデオロギーを隠しても良いもの」をいくつか整理してみる。その中には、「判断に迷うもの」が間違いなく出てくる。その判断がまさしく新大統領の政権運営の分水嶺になると考える。選挙戦前、選挙戦期間、当選後を通じ変化を見せる新大統領は柔軟な思考の持ち主であり、人の意見をよく聞いて取り入れるタイプの人間であるという声が多い。まさに、主張の変化の部分こそが、新大統領の真骨頂であるとも言える。「意見を変える事に関する否定的見方」をやめ「意見を聞いて変える度量」を評価すべきである。これがルセフ元大統領との決定的な違いでもある。

腐敗・汚職

政治から腐敗・汚職を無くす事。これは、ブラジル政治にビルトインされた悪習を無くす事で、並大抵のことではない。しかし、この志は変わるこ

はないと見ている。新大統領の骨格をなす姿勢である。ラバジャット作戦のヒーローであるセルジオ・モーロ判事を、当選後の早い段階で法務大臣に指名したのは、国民の応援をバックに政治をクリーンにするという意気込みである。

新たに任命される閣僚に汚職の嫌疑がかかった場合の対応が最初の課題で悩ましい。ラバジャットの時のように、モーロ新大臣のもと、徹底的に進めればよいが、庇護するようだと、お手盛りという批判を浴びる。大切なイデオロギーが台無しになりかねない。

議会運営

ブラジルの議会は、大統領府、政党および議員間における「持ちつ持たれつ」の関係で成り立ってきた。そこには、連立政権構築のため、大臣ポストの配布や、メンサロンと呼ばれる賄賂を、大統領側が連立を組む政党に渡し、法案を通してきた。

現状、新大統領は従来型の (日本ほどではないが、ある程度の) 連立を組む事はせず、より緩やかな、法案ごとに国会議員の判断に任せる方向の連立を考えているようだ。これが、年金改正法案をはじめとする重要法案で通用するかが最初の大きな山場となる。

市場や有識者は、依然としてある程度の連立を組むであろうと見ている。小党が見返りなしに連立を組むとは考えにくい。何が連立の「餌」になるのかもよく見ておく必要がある。イデオロギーを貫く方法で行って、年金改正が困難になった場合、果たして切り返しの手段はあるのか？ここが大きなチェックポイントである。

もっとも、紙幣輸送機ベトロラス

(国営石油会社) はラバジャットでなくなり、渡す資金もないのが実態である。

大きな政府・小さな政府

公共部門の支出拡大による景気浮揚策を軸とした大きな政府には断固として反対し、小さな政府を目指す。これは、「アンチPT」という重要なテーゼである。新政権はあらゆる局面でこのメッセージを打ち出してくる。しかし、肥大した公務員を首にすることはブラジル憲法上不可能である。従って、公務員を首に出来ないという大きな壁が立ちだかる。「現状維持」というイデオロギーに反する妥協も必然である。

例えば、ルセフ政権で39あった省庁を15にすると公言していたものの、足元では22ぐらいに落ち着くとみられている。大切なのは削減する意志であり、削減の絶対数ではない。実際、国家公務員試験により「肥大してしまった」公務員の数直ぐには減らせないので省庁削減で歳出削減の目立った効果はない。むしろ、連立政権構築のためのポスト配布目的での省庁数のつじつま合わせを無くす意志に新大統領の価値がある。現実にも筋は通している。

スーパー大臣パウロ・ゲデス

ゲデス氏の評価は2つに分かれる。シカゴ学派のエコノミストのバックグラウンドを軸に高い評価をする人々と、同氏のある意味「経営手腕」に疑問を持つ市場関係者も多い。正直市場関係者にネガティブな意見が多い。

ここで言う経営手腕とは何か？ ブラジルにいる各省庁の官僚たちは、優秀なエリート軍団である。ゲデス氏



村田俊典
(双日㈱執行役員兼
双日ブラジル社会会長)

の手腕は、この官僚達=チームが支えていると言っても良い。チームの意識を高く維持して、正しい判断をして行く事が果たして出来るか？学者に大臣が勤まるか？という疑問を市場関係者は持ち始めている。

話しは少しそれるが、PT 政権下育って来た官僚の質を心配する向きもある。メリトクラシーが機能せず、腐敗も進んだブラジルで10年以上育った若手に果たして国を支える気概を持った官僚がどのくらいいるのか疑問だと言う声も聞こえてくる。

また、新大統領との相性も注視する必要がある。民営化に対する考え方の違いを始め、まだまだ意思疎通が図れていない。新大統領は経済の事はゲデス氏に一任すると言いつつも、ポイントになる所では介入している。フレキシブルな大統領ならではの手腕だと思うが両者の関係がどのように進んで行くか、市場関係者が大きく注目している点である。ルセフ VS レビー大臣の二の舞いになるようだと思わぬクライシスがやってくる。

外交

新大統領にとっては未知の領域である。自分の気持ちとイタマラチ (外務省) の駆け引きが永遠に続く構図になる。しかし、ここは最終的にイタマラチの意向を聞き入れるはずで、新大統領の勝手は許さないだろう。

今はあまり新大統領のコメントを鵜呑みにする必要はない。一旦決定が下されたのであれば、それはイタマラチの意向を踏まえた判断であると理解して良い。

ブラジルにとって大切な国である中

国と新大統領の気持ちに近いトランプ米国。両大国の貿易戦争の狭間で下されるイタマラチの手腕も見どころである。恐らく、両者に良い顔をしながら実害を避け、かつ果実を求める手綱さばきとなろう。

農業族議員

FPA (Frente Parlamentar da Agropecuaria) という農業族議員達 (下院・上院で260名程の一大勢力) との連携は新大統領にとって極めて大切である。いわゆる、中道 (Centrao) 政党を取り込み、法案可決のバックボーンとなるからだ。言い方を変えるなら、農業関連ビジネスは大きな追い風が吹く事になる。FPAの代表テレザ・クリスチーナ氏は農務大臣のポストに就く。

クリスチーナ氏は農業の許認可のスピードを上げる法案を準備して来た人物であり、新大統領にとって大切な応援団の味方をするのは自然の流れだ。

軍関連議員

実は新大統領のアキレス腱である。勢力は下院改選前35から61まで伸ばした、新大統領のお膝元である。ところが、最重要法案である年金改革で退役軍人を含めた軍関係者は痛みを伴う事になる。国の将来のために、一番の身内を切る決断が出来るか。新大統領の腕の見せ所である。ここがお手盛りになるようであれば、世論は納得が行かないだろう。

科学技術省

「新大統領が大切に思っている事は何か？」と言う問いには、「大臣ポストが決まった順番だ」と私は答えている。後に決まった大臣は、ポストの配分などの

大所高所の判断になるはずだ (独立した権限を持ち、だからこそ人選が難しい環境省は別)。当選前から決まっていたパウロ・ゲデススーパー大臣や国会対策担当のオニックス官房長官、当選後に決まった、セルジオ・モーロ法務大臣、FPAを取り込みたいクリスチーナ農務大臣など、新大統領の強い意志が感じられる人選が行われた。

その中で意外と感じられたのは、早々に決まった、マルコス・ポンテ科学技術大臣ではないか。空軍やPSL (社会自由党) という身内であるものの、南米出身初の宇宙飛行士であるという経歴も目を惹く。決めやすかった点もあろうが、新大統領が大切な分野であると感じているのは間違いない。ブラジルに高い科学技術を植え付けたいと考えているのだと思う。

まとめ

- ・新大統領の人の話を良く聞くフレキシブルな人物像は高い評価。
- ・アンチPTの徹底を軸にした政権運営 (小さな政府、歳出削減)。
- ・汚職・政治腐敗の一扫。身内の綻び (if any) の対応は重要なポイント。
- ・年金改革法案が第一の関門。緩やかな連立が成り立つか？
- ・景気浮揚の為の経済政策、ゲデス大臣との相性は注意点。
- ・外交は実質的に外務省主導。当面は様子見。
- ・もっと大きなアキレス腱は身内の軍関係者。
- ・農業・科学技術は追い風

私はいくつかのリスクファクターを乗り越えられれば、ボルソナーロ政権は安定して行くと考えている。日本から見えるもの (ブラジルのトランプ) は新大統領の真実ではなく、実際は思慮深い人物なのである。そしてその新政権の特徴を理解して、いかにビジネスにつなげるかが進出日本企業のチャレンジである。



外交史からみた 新政権の課題と問題

各国の関心を集めた 2018年大統領選を振り返る

2018年10月28日、ジャイル・ボルソナーロ候補（社会自由党 PSL）が決選投票でアダッジ元教育大臣（労働者党 PT）候補を下し、ブラジルの新大統領に選出された。前後日を含めて投票日当日の主要各国紙（国際面）をみると写真付きで取り上げているものが多く、中には一面で取り上げている紙面もあった。今回のブラジル大統領選に世界は関心を持っていったといえよう。それはなぜか。一つには欧米を中心に世界で左右ポピュリズムの波が広がる中で、ボルソナーロを右派ポピュリストと位置づけ、南米ブラジルにもそうした動きがあると分析されたからである（例えばフランスのフィガロ紙は世界のポピュリズムに関する特集を組んだ）。

ボルソナーロ自身のプロフィールや発言にも注目が集まった。元陸軍大尉であること、近年のブラジル政治を動かしてきた労働者党（PT）やブラジル社会民主党（PSDB）といった既存政党ではなく、PSL という極めて小さな政党出身であったこと（メディアでは「アウトサイダー」や「反エスタブリッシュメント」という言葉でボルソナーロ候補を表現）、また選挙戦を通して女性や性的マイノリティに対する差別的発言や、治安維持を目的に銃所持の規制緩和や警察力の強化を主張したことなど、「ボルソナーロ」という人物が今回の大統領選に出馬し決戦まで残ったことで多くの国がブラジルに関心を寄せたのである。

獄中にあるルーラ元大統領が出馬するのか（むしろできるのか）ということも注目された理由の一つである。結果的にルーラは8月末の時点で出馬不可能となり、PTはこの後候補者をアダッジに

切り替えて選挙戦を戦うことになった。第1回投票を経て決選投票は「右派で軍人出身のボルソナーロ」対「左派PTからルーラの代役として出馬したアダッジ」の構図となり、有権者は2019年1月1日にスタートする新政権がPTになるのか、それともPT以外になるのか、という2つの選択肢から判断を下すことになった。「ボルソナーロ支持ではないがPTにはもう飽き飽きした。だからボルソナーロを選んだ。“その人”（=PT）を選びたくないから本来ならば選ばない人（=ボルソナーロ）に票を投じたのは初めてだ」という有権者のコメントがシンガポールの Straits Times の記事に掲載されていた。今回の大統領選挙では棄権票も多く、とくに10月28日の決選投票の棄権率は1985年の民主化後、初の大統領直接選挙となった89年以来最も高かった（21.3%。このほかにも白票や無効票あり）。筆者が目を通した各国紙には苦渋の選択をした有権者の声や今後のブラジル社会の「分断」を懸念する声を取り上げたものも少なくなかった。

ブラジル外交の これまでの歩み

本稿の目的はボルソナーロ新政権に託された外交課題やボルソナーロ外交の立つ位置を考えることである。まずは新政権に至るこれまでの各政権の外交の特徴を簡単にまとめておきたいと思う。

冷戦構造の終結と経済グローバル化の動きが始まった1990年代以降、カルドゾ政権時代にブラジルはより積極的な外交路線に転じた。民主主義や人権、軍縮、核不拡散など地球規模の課題にコミットすべく、国連を中心とした多国間協議への参加が顕著になった。通商政策では、1995年にスタートしたメルコスール（南

米南部共同市場）を軸にブラジルは南米そして国際経済への参入を目指した。

21世紀を迎え、ブラジルの積極外交はルーラ政権のもとでさらに明示的になった。日本、ドイツ、インドとともに国連安保理改革を目指し結成したG4、WTO交渉で先進諸国の政府補助金撤廃を求める南の農業国22か国グループの結成など、多国間協議の場で積極的に発言しプレゼンスを高めるブラジルはしばしば「グローバル・プレーヤー」と呼ばれ、2014年のサッカーW杯や16年の夏季オリンピック・パラリンピックの招致成功もこうした流れの中で実現したのである。

南の国同士の結束いわば南南関係を重視するスタンスは、アフリカや中東諸国との関係拡大・強化、南米諸国連合（UNASUL）やラテンアメリカ・カリブ諸国共同体（CELAC）の発足、そしてBRICSやインド・ブラジル・南アフリカ（IBSA）対話フォーラムなど、ルーラ外交において二国間、地域間、そしてグローバルな場面において展開した。ルーラ政権の外交は続くルセフ政権にも基本的に引き継がれた。ルーラ、ルセフ両政権で外交顧問を務めたマルコ・アウレリオ・ガルシアのもとでPT政権の南南外交は、賛否はあるもののブラジル外交の代名詞となった。しかしながら国内政治経済が混迷する中でルセフ政権は内政を重視せざるを得なくなり、外交は低迷し、次第には迷走するようになった。ルーラ政権時代の積極外交を後押しした国際経済環境（中国ブームや資源価格の高騰など）が逆転したことも影響しており、ルセフ政権ではグローバル・プレーヤーという言葉は遠ざかる一方であった。

弾劾辞職したルセフ政権の後を受けて、メル政権は暫定期間を経て2016



子安昭子
(上智大学教授)

世界の主要紙に取り上げられた
ボルソナーロ新大統領



年8月末に正式に発足した。ルセフ政権同様に、政治や経済の混乱が続く中でメル政権の外交も目立った成果はなかったが、少なくともブラジル外交刷新の動きが始まったことは確かである。人権や民主主義の尊重といったブラジルの外交理念を遵守し、国連などの多国間協議の場を通してグローバルアジェンダに取り組むこと（=多国間主義）、南米やラテンアメリカ諸国との関係を重視したうえでグローバル・アクターとしてより全方位の外交を目指すこと（ヌネス外相は任期中、欧米諸国のみならず、南米、アジア、アフリカを訪問）、ルーラ政権時代に南米左派政権の集まりとして政治色が強くなったメルコスールの地域貿易協定としての再生を進めるべく、太平洋同盟との関係構築に向けた動きを始め、通商政策全般に力を入れること、また同じくルーラ政権が力を注いだ「南南協力」について、とくに対アフリカ外交では経済協力といった段階を超え、ブラジル製品の販路拡大を目的としたよりビジネス志向型の関係が目指されたのである。

新政権の外交方針に対する 各国の懸念

新大統領となるボルソナーロには中南米諸国を含め各国が祝福のメッセージを送っている*。その一方で選挙公約としてボルソナーロ陣営が掲げた外交方針（例：新たなイタマラティ、対米関係重視、二国間交渉や二国間協定重視など）、また「イスラエル大使館をエルサレムへ移転する」、「中国はブラジルを買っている」、「パリ協定（2020年以降の地球温暖化防止に関する国際的枠組）から脱退する」など様々なボルソナーロの発言ゆえに、新政権の外交の方向性を懸念する声が各国から聞かれたことも確かであ

る。ボルソナーロがPT政権時代の左派イデオロギー偏重の外交を批判したことに対して、例えばマリポーサ南ア大統領がBRICSとの関係について取り上げ、もしブラジルがBRICSから離れることがあればそれは南アにとって大きく影響すると述べるとともに、「ブラジルにとってもダメージが大きいはずだ」とくぎを刺した。またメルコスールについては二国間交渉重視の姿勢を示す新大統領に対して、パラグアイ外相が「たとえボルソナーロが大統領になっても、メルコスールは地域貿易協定としての結束を強めていく方針に変わりはなく、統合のプロセスが後退しないことを望む」と述べている。

「中国はブラジルを買っている」として中国資本の過度なブラジル進出を批判するボルソナーロに対して、中国政府は強い警戒感をもっていた。新大統領の誕生に祝意を表すと同時に、中国の英字新聞チャイナデイリー（China Daily）には「熱帯のトランプ（Tropical Trump）には中国との関係を分裂させる根拠はない」という見出しで社説を掲載した。有権者の支持を得るためにボルソナーロがトランプの言動をいくら真似たとしても、トランプの貿易政策まで真似る理由はなく、中国とブラジルのこれまでの経済・貿易関係を鑑みれば、中国との関係を悪化させるようなことはブラジルにとって意味はないという、いわばブラジルを牽制するものであった。

おわりに 新政権に託された課題は何か

ボルソナーロ新政権はすでにこうした世界の声を一部受け入れ入れていると思われる。過度な中国を批判する発言は減り（大統領選後、新華社通信へのインタビューで中国について「アジアにおける偉大な協力パートナー」と発言）、イスラエル大使館移設やパリ条約からの脱退もすでに言わなくなっている。そうした中で2019年11月開催予定の国連気候変動枠組条約第25回締約国会議（COP25）の開催誘致を断念するというニュースが飛び込んできた。ブラジル外務省によると、予算上の問題そして新政権（閣僚の）環境やアマゾン開発に対する立ち位置から判断したとのことである。これまで気候変動や地球温暖化対策の分野ではしばしばブラジルはリーダー的存在であった。ボルソナーロ新政権に託された外交面での課題が、グローバル・プレーヤーといわれなくなって久しいブラジルの立ち位置をもう一度確実にすることであるとすれば、今回のCOP25開催誘致断念の決定がブラジルのイメージダウンにつながることは避けられない。いまだ未知数の部分が多く、今後も選挙公約で述べたことを修正することがあるかもしれない。新政権の外交の舵取りについて今後も注意深く見守っていく必要がある。

インターネットのニュースサイト「メルコプレス」の記事(2018年10月29日)によるとラテンアメリカ諸国はほとんどの国が大統領当選に対して祝意を送っている。ベネズエラのマドゥロ大統領も外交儀礼に則り祝意を表すメッセージを送ったと報じられたが、ボリビアとウルグアイはこの段階では未送である。 Latam leaders congratulate Brazilian people and Bolsonaro; Uruguay ex president Mujica compares him with Hitler, Mercopress, oct.29th, 2018. en.mercopress.com (2018年11月28日入手日)。

魚食啓発ワークショップにおける 日・伯・アフリカ交流の試み



佐藤安紀子
(NPO 海のくに・日本 理事・編集長)

「私にお任せください」

私たちはこの夏、水産資源の持続的利用と魚食啓発をテーマとするワークショップをサンタカタリーナ州フロリアノポリスで開催したいと考えた。この地で9月10日から国際捕鯨委員会（IWC）が開催されることがきっかけであるが、ワークショップは鯨から離れ、水産資源全般をテーマにすることを企図した。そして現地の漁業関係者に参加してもらいたい、会場はどうしよう、受け皿となって手助けしてくれる人はいないだろうか・・・と模索していたとき、クリ



↑ワークショップ



↑試食会

チバの木村元総領事をご紹介くださったのが日本カタリーナ協会のホシャーナ会長だった。私は心を込めてメールを送った。しかし初メールを送ったのがすでに8月半ば、ワークショップ希望日まで1カ月もない。断られても仕方ないと思いながら返信を心待ちにした。そこに返ってきたのが「私にお任せください」という冒頭の一言だった。

私たちは心底驚き、感激した。ブラジルにはなんてすごい肝っ玉母さんがいるんだろう！そして自問もした。このような一言を、自分たちは書けるだろうか。紹介者たる木村総領事にも私たちはお目にかかってはならず、メールのやりとりだけで

ホシャーナ会長をご紹介下さったのだから、本当に夢のようなお話し連続。このお二人がいなければ、私たちのワークショップはまったく違うものになっていたに違いない。

木村総領事は、自分は新潟県佐渡島の漁師の息子だと知らせてくれた。そして私たちの活動にシンパシーを感じ、とくに85才のいまも先頭に立って「日本の漁業と魚食文化を大切にしよう」と活動を続ける白石ユリ子理事長を応援しようと思ってくださったとのこと。信じられないような有難い出会いである。日本の漁師はこの50年で激減し、現在わずか15万人。そのご子息の一人が外交官になり、ブラジルに駐在されていたのだから、私たちには神様がついていてくださったに違いない。

「ブラジル・アフリカ・日本の 肝っ玉母さん大集合！」

ワークショップは9月9日、フロリアノポリス南部のモロ・ダス・パロダス公民館で開催した。前日、ホシャーナ会長と地元漁協の数か所に挨拶に行き、カキ養殖やスズキ漁の漁師さんと懇談させていただいた。その効果なのか、ワークショップ会場に漁師さんが続々

と家族ぐるみで来場。地元の若い人も大勢いる。また私たちがアフリカから招いた二人の女性漁業者、ママさんとアミさんを応援するためコートジボワールの日本駐在アタッチェとブラジル駐在アタッチェも駆け付けてくれた。メインスピーカーはワシントン条約元事務局長のラポント氏。日本からは白石理事長のほか、東京家政大学の内野美恵准教授、自然資源保全協会の宮本俊和事務局長。実に国際色豊か、言語はポルトガル語、日本語、仏語、英語が飛び交う。

歓談タイムには、日本から持参した煮干、佃煮、しらす干し、鰹節を並べ、ブラジル産の清酒「東麒麟」と共に味わっていただいた。願いは「日本人は古来、数千種類の水産資源を多様に食してきた。味の基本である出汁も昆布、鰹節など海のもの」「魚には多様な食べ方、保存方法がある。なにより健康長寿の源」を伝えること。来場者は私たちの意図をしっかりと受け止めて盛大に味わい、多くの感想を述べてくれた。

テーマの「水産資源の持続的利用」は、実はとても難しい課題だ。魚は爆発的に卵を産むため毎年「利子」の分だけ漁獲していれば資源が減ることはない。しかし実際には商品価値の高い魚が大量に捕獲され、海のルールができていない海域や漁業種も世界には数多く存在している。一方、資源は十分あるのに動物愛護の圧力から捕獲ができない鯨類やアザラシなど海獣類もある。

獲ったあとの処理が持続的でない国も多い。発展途上国の漁村には電気もガスも来ていないため、魚は獲ったそばから大鍋で揚げたり塩蔵や燻製にされているが、こぼれ落ち無駄になっている魚も数多い。

白石理事長が2011年から「すり鉢」を背負ってアフリカへ通うのは、「すり身」にすれば練り製品やスープの具材として様々な料理に加工できると現地女性たちに伝えたいからだ。付加価値は収入アップにつながる、なにより家族の健康に役立つと熱く語り、西アフリカ22カ国の女性漁業者ネットワーク（RAFEP）メンバーにすり身とその加工品づくりを教え続けている。2018年は9月にIWCが開催されたことから、とりわけ熱心なギニアとコートジボワールの代表をブラジルに招き、IWCとワークショップで「食料安保における漁業の大切さ」「アフリカの漁業のいま」を話してもらった。

こうして多国籍ワークショップは無事に終わったが、いまもすべてが夢だったような気がしてならない。肉食大国ブラジルで、水産資源のサステナブルユース・ワークショップを開催できたこと、そして日・伯・アフリカ交流が実現したことは、関係者全員の宝物としてしっかりと刻みこまれたことをご報告したい。



ホシャーナ会長（左から2人目）と地元漁師さんと共に

三井住友海上ブラジル、 路傍の石



長野昌幸
(三井住友海上ブラジル㈱
取締役社長 兼 CEO)

ブラジル事業の開始

当社の進出は、1960年代からのブラジル高度成長期に当地で新規投資・事業拡大を進めていた日系企業のお客さまに、本邦と同質の損害保険サービスを提供することを目的として、1965年創業のコンコルディア社（コチア産業組合傘下の保険会社）へ1972年に出資したことから始まった。

以後、おおよそ半世紀、沈まずも漂うブラジルの政治・経済・社会に翻弄されつつも、開業のミッションを守り続けている。

ハイパーインフレ時代

1970年代に発生した2度の石油ショック（当時のブラジルは国内消費分の原油の大半を輸入に頼っていた）と世界的な高金利をきっかけに、ブラジルがハイパーインフレに陥った1980年～1990年代前半は、日系企業のお客さま、そして当社のような損害保険業においても試練の時であった。

損害保険は保険料を頂いて、将来の事故時に復元費用をお支払いする仕組みだが、ハイパーインフレ下では、お客さまのリスクに見合った保険料の算出に加え、想定されるインフレの影響を加味するための修正計算が事細かに必要となる。このような不確定性及びコストを、ハイパーインフレを実感できない本社からはなかなか理解してもらえなかったようだ。この時期、多くの日系企業がブラジルを撤退したと言われる。

コチア産業組合のモラトリアム

1993年5月、コチア産業組合がモラトリアム（負債支払いの全面停止）を発した。当社が資本参加していたコンコルディア社の主要な取引は、日系企業のお客さまの事業とブラジル各地に広がるコチア産業組合関連の財物、物流に支えられていたため、影響は甚大であった。コチア産業組合の資産も凍結されてしまった。かかる状況にあって、ブラジルで事業を展開する日系企業のお客さまの負託に応えるため、三井住友海上（当時、三井海上）による、コンコルディア社の完全子会社化を検討し始めた。当時のブラジルは外資法により外国資本の参入を厳しく制限していたため、保険業の監督庁があるリオデジャネイロに日参して交渉を進め、1995年、子会社化を完了し、改めて日系企業のお客さまの事業に寄り添うというミッションを堅持する体制を整えた。



新しき酒を新しき革袋に

2001年、日本で三井海上と住友海上が統合して三井住友海上が誕生したことから、ブラジル現地法人の社名も現在のMitsui Sumitomo Seguros S/A（三井住友海上ブラジル）に改めた。折しもブラジルは、2000年前後からの中国市場の需要増を背景とした国際商品相場の上昇、資源輸出の拡大により、堅調に経済成長を遂げており、当時の社内には「新しき酒を新しき革袋に」という雰囲気があふれた。日系企業のお客さまの事業も拡大基調にあり、新規進出企業数も増加傾向に入った。

2008年にはブラジルの再保険市場が部分的に自由化され（従来は国営再保険会社の独占）、以前は基本的にブラジル現地法人に置いた限られた資本の範囲でしか引き受けることのできなかったリスクを、本社を含む海外再保険者からのキャパシティー（保険の引受能力）も併用して引き受けられるように体制を強化した。

BRICS、リオオリンピック・パラリンピック

四大新興国の一角として経済発展が期待されたブラジルであったが、経済が好調な時も産業政策・制度改革への取り組みが遅れ、製造業で一流の競争力を育成できなかった。このため、資源価格が下落基調に転じた2014年後半から経済は停滞し始め、再び日系企業のお客さまの業容も悪化した。

このように暗雲立ち込めた中ではあったが、2016年のリオオリンピックでは当社女子柔道部の中村選手と近藤選手がともに銅メダルを、またパラリンピックでは当社に在籍する道下選手が女子マラソンで銀メダルを獲得した。この際にはブラジル各地から数多くの日系企業のお客さま、日系ブローカー、日系人そしてブラジル人の当社ファン方が応援に駆けつけて下さった。

次代への挑戦

保険業界は変革期を迎えており、時間差こそあれブラジルも例外ではない。次世代モビリティ社会の到来、ビッグデータ周辺の新しいリスクの発現等の環境変化を見据え、業務のオンライン化やAIの活用等、デジタル化への対応を急いでいる。

現在の当社は、企業向けの保険から個人向けの保険まで、多様な商品をブラジル全土で販売しており、総売り上げに占める日系企業のお客さまとの取引の割合は1割弱である。しかしながら、「日系企業のお客さまへの高度の損害保険サービスの提供」という開業のDNAは、常に当社の体軸に宿っている。

ブラジルからの撤退



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士、
現在ブラジルで勤務)

連載

ビジネス
法務の肝

ブラジルは、潜在的には有力な市場であることは間違いないが、政治の不安定さに起因する経済状況のさらなる悪化の可能性や、労働コストなどの事業障壁から、事業の撤退を余儀なくされることもある。事業の撤退の方法としては、大きく分けて、会社の清算及び会社の売却がある。本稿では、それぞれの方法について、その手続きや実務的なポイントについて解説する。

1. 会社の清算

(1) 手続き

会社の清算手続きの大まかな流れは、日本での会社の清算手続きと同様である。すなわち、①会社解散及び清算人選任の株主総会決議、②公告、③清算活動（資産の売却及び負債の弁済）、④残余財産の分配、⑤会社清算の株主総会決議、⑥清算の登記という流れになる。

(2) 実務的なポイント

(ア) 株主総会決議

上記のとおり、会社の清算のためには、会社解散と会社清算の2回の株主総会決議が必要となる。もっとも、実務的には、上記③の清算活動を完了させたあとに、会社解散と会社清算の株主総会決議を1回で済ませることが多い。解散決議をすると、会社は株主総会を6か月に1回開催する義務を負うことになるため（通常は1年に1回）、これを回避するため、解散決議をできるだけ後にするのである。

(イ) 訴訟等の処理

会社清算で最も問題になるのは、係属している訴訟や行政手続き（主に税金に関する行政手続き）の処理方法である。ブラジルは訴訟社会であるため、数十件から数百件の訴訟等を抱えていることも珍しくない。会社を清算するためには、これらを全て終了させることが必要になる。理論上は会社の意思で全ての訴訟等を終了させることが可能であるが（民事訴訟や労働訴訟であれば、訴訟の取下げ、相手方の請求を認めて支払う、和解などで終了させることができ、税金に関する訴訟や行政手続きも同様に取下げや支払いで終了させることができる）、相手方との交渉や裁判所での手続きに時間がかかることも多く、いつ終了できるか予測することは難しい。また、例えば、ある労働訴訟について簡単に労働者の請求に応じてしまうと、ほかの労働者から同種の裁判を起されるリスクが高まる。そのため、清算に際しては、ある程度余裕を持ったスケジュールを想定し、かつ、訴訟等を終了させることについても、その方法について、1件ずつその内容を踏まえて検証する必要がある。

(ウ) 書類の保管

会社清算後も、会社は雇用関係や税務に関する書類を保管する必要がある。実務的には、法律事務所や会計事務所に保管を依頼することが一般的である。書類の保管期間は、それぞれの権利関係に関する時効期間満了までである。

2. 会社の売却

(1) 手続き

会社の売却方法はいくつか考えられるが、一般的には、株式譲渡の方法が採られる。株式譲渡が最も簡便な方法であるからである。会社の売却の流れは、日本の場合と変わりはない。すなわち、買主による対象会社のデューデリジェンス、株式譲渡契約の締結、契約の実行である。

(2) 実務的なポイント

(ア) 情報漏洩

実務的にまず重要となるのは情報漏洩の防止である。上述のとおり、会社の売却時にはデューデリジェンスへの対応が必要となるが、デューデリジェンスに対応するためには、資料の準備や買主からの質問への回答など現地社員の協力が不可欠となる。その際、現地社員から情報が漏洩するリスクがある。情報漏洩を防止するために実務的に行われている対応の一つは、会社売却の目的には一切触れず、「本社からの監査を目的とした調査」などと現地社員に説明することである。

(イ) 株式譲渡契約の内容についての交渉

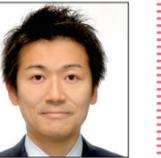
株式譲渡契約の主要な条項は、日本で一般的に用いられている株式譲渡契約と同様である。売主としては、それぞれの項目について買主と協議・交渉することになるが、会社売却の場合、売主の交渉力がどうしても弱くなる。売主としては、交渉決裂して会社を清算するよりかは、妥協してでも売却する方がメリットがあるためである（会社清算をするためには、上述のとおり、訴訟等をすべて終了させる必要があり、また、従業員の解雇も必要になるなど、手間も時間もかかる）。そのため、売主としては、妥協するとしても、どこまで妥協できるかをあらかじめ決めておくことが重要である。

株式譲渡契約の内容について、一般的に議論となる条項は、売却代金の額、売却代金の支払方法、売主の責任の範囲（表明保証と補償責任）、売主の競業禁止義務などである。これらの点に関して、「ブラジルで一般的な落としどころは？」という質問を受けることが多いが、いずれの点も当事者間の交渉により決定される事項であるため、ケースバイケースと言うほかはない。

ブラジルにおける 個人所得税



ジャーニーニ・ゴウラート
(KPMG サンパウロ事務所
タックス・パートナー)



寺出俊也
(サンパウロ事務所
シニアマネージャー)

2017年の本誌「税務の勘どころ」でも3回にわたり紹介されているが、個人所得税の年次申告期日が4月最終営業日であり、ブラジルに居住する海外駐在員の個人所得税について問い合わせを受けることも多いため、今回は改めてブラジルにおける個人所得税について説明する。

個人所得税の概要

個人が税務上におけるブラジルの居住者とみなされると、当該個人は全世界所得に対して下記の表（BRLはブラジル・レアル）に基づき、0%から27.5%の税率で納税義務が発生する。

2018年の累進課税テーブル

計算基礎 (BRL)	税率 (%)	年次控除金額 (BRL)
22,847.76 まで	-	-
22,847.77 から 33,919.80	7.5%	1,713.58
33,919.81 から 45,012.60	15.0%	4,257.57
45,012.61 から 55,976.16	22.5%	7,633.51
55,976.16 超	27.5%	10,432.32

つまり、税務上の居住者は、ブラジル国内だけではなく海外で得た収入（例えば、賃貸収入、賞与、配当、海外給与、年金所得等）も含めた全世界所得に対して課税される。一方で税務上の非居住者については、ブラジル国内で収入を得ている場合には、この収入のみ課税対象となる。

税務上の居住者はその年に受け取った収入、医療費、教育費、年金といった税務上損金算入可能なものから、賃料、弁護士費用と言った損金不算入となる項目も含む支出、資産・権利及び負債などの情報を年次所得税申告書において報告することが要求されるため、関連する情報を事前に収集しておく必要がある。当該申告書の提出期日は収入が発生した翌年の4月の最終営業日である。なお、ブラジルに居住する個人が海外で得た収入は、収入を得た国で所得税が徴収され、またブラジルにおいて所得税計算の対象となる。

なお、ブラジルは日本を含む34カ国と租税条約（Double Tax Treaties）を締結しており、ブラジルに居住する個人が海外で支払う所得税は外国税額控除として最終的にブラジルの税金と相殺することが可能となる。

場合によっては、二重課税を回避するための合意として、受け取った収入を非課税として取り扱うことが可能である。例えば、ブラジルと日本の租税条約に基づくと、ブラジルの税務居住者が日本で賃貸料、配当、利息、不動産売却に関連するキャピタルゲイン及び年金等の収入を海外で受け取る場合に非課税となる可能性がある。また、年度の途中で帰任した駐在員は年次確定申告を翌年の3月1日から4月の最終営業日までに行う必要があり、帰任後当該手続きを忘れないようにしておく必要がある。

月次申告

ブラジルの個人所得税は、年次の申告に加えて、月次の申告義務（Carnê-Leão）も存在する。月次申告書の提出期日は収入を得た翌月の最終営業日となる。月次申告においても海外で収入を得ている場合には、それが月次申告書の対象となる。なお、月次申告に当たった累進課税テーブルは年次とは別に定められている。また、上述の通り、日本はブラジルと租税条約を締結しているため、海外で支払った所得税は外国税額控除の対象となり、月次申告でもブラジルの税金と相殺することが可能となる。

その他の年次申告義務

その他の年次申告義務としてブラジル中央銀行へ報告書を提出する必要がある。ブラジルに本籍のある法人又は居住している個人で12月31日に海外に10万米ドル以上の資産又は権利を保有している場合には対象となる。ブラジル中央銀行の報告書にはブラジル以外の国で保有するすべての資産が含まれ、毎年、提出する必要があり、その提出期日は2月15日から4月5日までである。また、この報告は調査及び情報収集目的のためであり、税務には原則として影響しない。ただし、税務当局は開示された収入が純資産の増加の根拠となっているかどうかの観点から情報を使用することがある。資産が適切に報告されない場合には最大で25万レアルの罰金が科せられる可能性があることが法律で定められている。

現金ベースでの課税

個人所得税は、収入を受け取った時点で税金を支払う現金ベースのシステムとなっている。つまり、駐在員が12月25日に給料を受取り、12月30日に駐在期間が終了して帰国した場合、12月25日に受取った給料については、ブラジルで課税対象となる（一方で12月24日に出発した場合には、一定の手続きを行うことで12月25日に受取った給料はブラジルで課税対象とならない）。

社会保障料

社会保障料に関し、ブラジルは日本を含む22の国と国際社会保障協定を締結しており、この協定により、ブラジルに赴任した個人は自国の社会保障機関に適用証明書（Certificate of Coverage）を要求することにより海外で支払われた報酬及びブラジルで支払われた報酬に対する従業員と雇用主の社会保障料の支払いを一時中断することが可能となる場合がある。

複雑なブラジル税制を遵守し、税務及び社会保障のベネフィットを最大限に得るためには、税務専門家への相談も必要となる場合もあるであろう。

パジュバー論争



且 敬介
(作家・翻訳家、明治大学教授)

毎年11月の日曜日がブラジルでは二週連続、全国統一中等教育試験(ENEM)の試験日になる。高校卒業レベルの学力を測るための試験だが、この成績だけで合否選抜する大学もあるため、統一入学試験のような性格をもつようになっている。ラテンアメリカでは、大学卒と高卒の賃金の差が大きい、OECDのデータでは、一番差が大きいのがブラジルで、大卒だと給与が2.5倍になるという(日本は約1.5倍)。それだけに進学率は近年、急速に高まって、ENEMの受験者も550万人を超え、今では世界で二番目に受験者の多い試験だそう。しかも国土の広いブラジル全国の1700以上の町で同時実施するのだから、そのロジスティクス的な大変さを考えただけで苦しくなってくる(日本の大学入試センター試験は50万人台、全会場数が700程度なのでケタがちがう)。

2018年の試験は新政権関係者からの批判が声高に出されたことから僕も興味をもった。実施方法や問題を調べてみると、これが本当に面白くてユニークだ。両日とも時限は一つだけで、ぶっ続けて五時間半(第二日は五時間)の試験をするので、昼食休憩をとる必要がないように午後一時半に開始だという。初日の科目は「言語および記号体系とその関連テクノロジー」と「人間科学とその関連テクノロジー」および「小論文」で、第二日が数学と自然科学だ。「小論文」も実に興味深い設問なのだが、ここでは述べる余裕がない。

小論文以外はすべての問題が五択からの選択式なので日本のセンター試験に似ているとも言えるが、内容はかなり違うのがすぐにわかった。最初の科目は主に「国語」と「外国語」に該当すると言いたいところなのだが、科目名にあらわれている通り、言語以外の表現の読解の問題がいくつもある。たとえば、ロック・コンサートの舞台上の写真を見せて、ヨーロッパのオペラとどのような点で共通性があるかと訊いたり、モダン・アートの彫刻作品と先住民文化の陶器の差異をどのように表現できるかと問うたりする問題がある。言語表現に関して、内容の読解だけを問うのではなく、引用されている文章や漫画や広告などにおいて利用されている伝達のストラテジーや論理の構造、言語のレベル(とくにポルトガル語では口語と、マスコミの言語、アカデミックな言語、文学言語などの間の差異が大きい)の分析が必要になる問題が多い。そういうトレーニングを受けていない身としては、正直、けっ

こうむすかしかった。問題に文句を呈した年長の政治家や評論家たちには、たぶんむすかしすぎたのだと思う。

題材も刺激的だ。女性に対する暴力行為の告発を受けつける機関の連絡先の広告や、同性愛者の存在を隠蔽しようとする力学が働く家族の関係を描いた小説、代表的なアフロ・ブラジル人作家クチーの詩、視覚障害者の映画鑑賞を助けるアプリの導入などが扱われている。話題としてきわめて先進的で、多様なものを包摂する社会への自覚が読みとれるものが多いことはたしかだ。ただし、そこでも質問の要点は、そのイデオロギーそのものではなく、その伝達手法の分析や、大人っぽい抽象的な用語の使い方のほうにあるのが特徴だ。

とくに話題になって、僕も興味を引かれたのが問31だ。これは全文を引用してみたいぐらい面白い問題なのだが、要点だけを書いてみる。ゲイの人たちの間で使われているスラングの体系に「パジュバー」というのがあるという、その例文が掲げられている(意味は全然わからない)。続いて、パジュバーを職場の同僚とよく使っているという弁護士の証言があり(この人はゲイだという意味があるのか?)、しかし最近ではスラング辞書などにも収録されていて、わかる人も増えてるので気をつけないといけないと思ってる、などと語る。そこからが質問で、この人はパジュバーが確立したひとつの方言のような地位を得たと言っているわけだが、その根拠を彼は次のどの点に求めていたか、と論理の進め方を問うのだ。これに対して批判者は、ゲイでなければ解けない問題を出した、こんな軽薄な話題を出すべきじゃない、などの外的なことを言った。

僕が個人的にとくに興味をもったのはパジュバーの語彙のかなりの部分が西アフリカのヨルバ語に由来しているという部分だったのだが、調べてみると、アフロ・ブラジル宗教カンドンブレのテレイロ(寺院)は昔から、主流社会から排除された人たち(逃亡者やシングル・マザー、障害者など)を受け止める場所として機能していた部分があり、そのコミュニティの中では常にホモセクシュアリティが包摂されてきたので、パジュバーの成立とも深い関係があるのだという。

問題は公開されているので、ぜひ一度挑戦をお勧めしたい。長い文章の読解がないという問題点はあると思うが、ブラジルの大学生、恐るべし、とよくわかる。



西林喜久子
(元サンパウロ総領事夫人)

キスの洗礼

ブラジルなどラテン系の国では、ちょっとした友人や知り合いとの挨拶でキスをするのが一般的である。私たちはそれまで主に米国と東南アジアの在勤であったので、この習慣に慣れるまで夫婦共々少々腰が引けた。米国では普通は握手、親しい友人に久しぶりに会えばハグするくらいである。ところが、ブラジルでは知り合って間もない相手とでも男女関わらずハグしてキスが「こんにちわ」代わりなのである。

とにかく、誰とでも一人ずつ行うので、女性ばかりの会合などでは時間がかかってしょうがない。まずメンバーが予定時間通りに集まることは無く(これもラテン的)、五月雨式にやって来て、着いたばかりの者は既に到着しているメンバー一人一人にキスして廻る。30分ほど遅れてやっと会合を始めると、また誰かが遅れてやってきてキスの儀式が始まりそのたびに会合は中断される。会合が終了し皆が一斉に辞去する際は更に大変である。各々が全員一人一人にお別れのキスをするまで帰れない。20人いれば、一人19回×20人割る2と計算上は190回のキスが行われる。勿論、多分に形式的

なものなので手早いし、忘れて飛ばすこともあるのだが、日本や米国のように、一言「皆さんさようなら!」と言ってさっと立ち去れないのである。

サンパウロに三年半ほど在勤した後は、キューバ、ギリシャとラテン系の三カ国に計10年以上住み、今もイタリアにご縁のある生活をしている。ブラジルでキスの洗礼を受けてからは、慣れとは恐ろしいもので物おじせずにラテン式挨拶が出来るようになった。

今となっては、親愛感溢れるこの習慣は懐かしくもあるが、どうも現在では一部で逆風にもさらされているようである。一つは、セクハラ危険性であるが、ラテン系の人びとはまず意に介さないように思われる。もう一つは、感染症の危険性。勿論あちらでも風邪引きの人はキスを遠慮するのがマナーではあるが、衛生観念が非常に高まった現代社会では日本のお辞儀が非接触の清潔な挨拶だと感じる人々が外国でもいるようで、将来お辞儀をする外国人が増えることを夢想するとちょっと可笑しくなる。

ジャーナリストの旅路

講演会「ブラジルと日系人」を終えて

中島慎一郎
(読売新聞新潟支局長、元リオデジャネイロ支局特派員)

郷里の群馬県高崎市の国際交流協会から、移民110周年を迎えたブラジル日系人について講演を頼まれ、12月2日、小中学生ら約30人を前に「ブラジルと日系人」と題して話をした。

準備のため、2004年から約3年間、中南米特派員としてリオデジャネイロに駐在した時代のスクラップブックを久しぶりに開き、当時取材した日系人に関する記事を読み返した。

初めての日系人関連記事は、2004年9月に94歳で亡くなったサンパウロ新聞編集主幹の内山勝男さんの追悼記事だった。

内山さんは1930年、徴兵を逃れるため単身、移民船乗り込んだ。サンパウロ州のコーヒー農園で働いたが、マラリアに倒れ、邦字紙の記者になったものの、太平洋戦争開戦で発禁処分。終戦を迎えると、日本の勝利を信じる「勝ち組」と敗戦を認める「負け組」との抗争が起き、「正確な判断には日本語ニュースが必要」と46年にサンパウロ新聞を創刊した。文字通り生き字引だった内山さんが半世紀以上手がけた社説は「日系社会の羅針盤」とされていた。

2005年9月には、出稼ぎ先の日本から一時帰国した男性一家が強盗に狙われ、5人が殺害され、現金を奪われた上、家に火を放たれるという凄惨な強盗殺人事件がサンパウロで起きた。出稼ぎ帰りの日系人は当時、犯罪者の格好の標的で、出稼ぎを秘密にしたり、帰国に合わせて転居したりする日系人も少なくなかった。

2007年2月には、静岡県で起きた女子高生ひき逃げ事件で業務上過失致死などの罪に問われた日系人男性の初公判がサンパウロで開かれた。当時、罪を犯した日系ブラジル人の逃亡が増え、この裁判は、日本政府の要請でブラジル側が同国の法律で裁判を行う初の「代理処罰」だった。

講演会では、ブラジルの魅力、日系人の貢献や高い社会的評価などを伝える一方で、国策や経済に翻弄され、日本では子供の不登校や犯罪、日本人との心の壁などの諸問題を抱える日系人の現実も紹介した。

群馬県大泉町には多くのブラジル人が暮らしている。若い世代がブラジルや日系人を正しく理解し、真の友好を深めてくれることを期待したい。

マウリシオ・デ・ソウザと手塚治虫

手塚プロとのコラボ新展開そして在日ブラジル人子弟への視線

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

マウリシオ・デ・ソウザ・プロダクションズ

今やラテンアメリカで最大のマンガ制作会社となったマウリシオ・デ・ソウザ・プロダクションズ（略称 MSP）。既に 59 年の歴史を有し、150 名余りのアーティストを抱え、コミック出版、アニメ制作、テーマパーク運営といった総合エンターテインメント企業に成長したことから、英国の BBC が「ブラジルのディズニー」と名付けたのも首肯できるところだ。

そんな MSP は、今年（2018 年）に入って日本法人を立ち上げ、ビジネス面ばかりか社会貢献の面でも新地平を切り拓きつつある。今回はこの辺の背景を追いかけておこう。

国民的マンガ作家、マウリシオ

モニカ、セボリーニャ、カスカウン、と聞いて「誰それ？」なんて反応するヤツがいるとしたら、ブラジル人としては「もぐり」だ、と決めつけられてしまうだろう。そういえるほど、マウリシオが自分の娘モニカをモデルに創案したキャラクターは、老若男女を問わず国民に知られている。モニカと仲間たちが活躍するマンガ小冊子の累計販売部数は 11 億部以上とのことだから、彼はまさに国民的マンガ作家である。

そんな彼の自伝が昨年（2017 年）刊行されるやたちまちベストセラー入りしたのは、その内容が、事実は小説よりも奇なり、を地で行くような面白エピソードのテンコ盛りで、一般読者を惹きつけたからだ。筆者も入手して読み出したら、簡明な文体で書かれていることもあって一気に読んでしまった次第だ。例えば、彼のルーツについて。母方の祖父は北東伯のパライバで大農園主だったが、地元政治に首を突っ込みすぎて政敵に雇われたジャグソン（殺し屋）に付きまとわれ、命からがらサンパウロに逃亡してきた由だ。そんな過去を有する一族の一員として生を受けたマウリシオは、日系人も多く住むモジ・ダス・クルーゼスで育ち、10 代後半になるとレコード会社の経理補助兼タイプ係として働

いていたが、もともと好きだったマンガで名

を挙げようと一念発起して州

都サンパウ

ロに向かい、

コネも全くな

いまま新聞社

（フォリャ・ダ

マニャン紙）

を訪ねる。そ

の時 19 歳。マ

ンガ要員として

は不採用だった

が、社会部記者

補佐として採用

されたため、事

件記者として記事を書くことになる。この 5 年間の現場社会経験（1954～59）が、その後マンガ家として活躍するにあたっての肥やしとなったのだ。

1959 年にマンガ家としてスタートした彼の最初の連載コミックが『Bidu』で、このなかのキャラクターとしてモニカが登場するのは 1963 年であった。独立したマンガ小冊子『モニカと仲間たち』の第一号が刊行されたのが 1970 年、その後の躍進は衆知の如し、だ。

マウリシオと手塚治虫の親交

1984 年手塚治虫が国際交流基金の招待でブラジルを訪問した時、マウリシオと知り合い、その時から親交を深めることとなる。マウリシオが日本を訪問した時は、手塚自身が空港まで出迎えており、手塚治虫創作活動 50 周年記念パーティーにも招待したり、手塚の故郷宝塚へも連れて行ったり、という仲になったのだ。だが、手塚を襲った病魔が二人の交友関係を分断することになる。

1989 年にマウリシオが来日した時、手塚の病状（末期ガン）は予断を許さない段階に入っていたが、病身を押しつけてマウリシオの宿泊ホテルを訪ね 2 時間以上も二人で「夢のコラボ」について話し合ったのだ。手塚が亡くなったのはその後まもなくだ。

その時の約束を一部果たしたのが、2012 年に発表した『MONICA Jovem』で、ここではモニカと鉄腕アトムが協力してアマゾン環境破壊・森林伐採と闘うというストーリーが展開されるのだ。

手塚プロとのコラボがついに具体化

手塚治虫生誕 90 周年を記念して 10 月にマンガ雑誌『TEZUCOMI』Vol.1 が刊行された。当初『TEZUKA MIX』として発行する企画だったが、半年遅れで誌名も変えてようやく具体化したものだ。この新プロジェクトの目玉が、「プリンセスナイト」だ。これは、「ローマの休日」と「リボンの騎士」を重ね合わせたストーリーを手塚プロが手掛け、その絵をマウリシオが描く、という「夢の共演」である。

日本におけるマウリシオの社会貢献活動

朝日新聞でも報道されたが、マウリシオが描いた「日本の学校紹介」マンガ冊子が補助教材として広く使われている。例えば、滋賀県湖南市立水戸小学校内に設置された「さくら教室」は、地元の公立小中学校に在籍するが来日したばかりで日本の事情に慣れていない外国籍の生徒たちを対象とする「準備コース」として市が設立したものだが、この補習教室で活躍しているのがマウリシオ冊子である。このマンガ冊子はポ語版のほか英語版やスペイン語版も含め 1 万部以上印刷され、数百もの教育関係機関に配布されている。駐日ブラジル大使館も後援する、この社会貢献活動はもっと注目されるべきだろう。まさにブラジル文化のソフトパワーでもあるからだ。



右) マウリシオ・デ・ソウザ自伝表紙
左) 日本の学校紹介マンガ冊子

2018年第三四半期のGDP伸び率

IBGE(ブラジル地理統計院)の発表によれば、2018年第三四半期のGDP伸び率は、サービス部門並びに農畜産産部門が牽引したおかげで、前期比プラス0.8%、前年同期比ではプラス1.3%となった。但し、ピーク時(2014年第一四半期)と比較すると、まだマイナス5%となっている。

ちなみに、今年2018年のGDP伸び率は1.3%、来年2019年は3.0%増と予想されているが、外的要因(米中貿易摩擦ほか)や内的要因(年金改革ほか)によって左右されることになる。

昨年2017年、197万人が貧困層へ下落

12月6日付けエスタド紙の報道によれば、世界銀行が貧困層と認定している一人一日当たり所得5.5ドル以下の貧困層が前年比で197万人も増加した。長期にわたる経済低迷と高い失業率の結果といえる。

地域別、人種別にみると、貧困層5,480万人の44.8%に相当する2,560万人がノルデスチ(北東伯)に集中しており、南部に居住する貧困層380万人は、人口の12.8%でしかない。また、黒人・褐色の男性の34.1%は貧困層に属しており、これは全人種の平均値よりも7.6%も多い。

中銀の政策金利据え置き(6.50%)

10月31日、ブラジル中央銀行の金融政策委員会(Copom)は、政策金利(Selic)を年率6.50%に据え置くことを全会一致で決定した。この政策金利の据え置きは5会合連続(5会合前までは過去12回連続で引下げ)となった。なお、今回の政策金利の据え置きは、市場関係者の予測と一致していた。

アラウージョ次期外務大臣の指名

11月15日付コヘイオ・ブラジリエンセ紙は、14日に次期外相に指名されたアラウージョ北米局長に関する記事を掲載している。概要以下のとおり。

1. ボルソナーロ次期大統領は、11月14日、アラウージョ外務省米国・カナダ・米州担当局長を外務大臣に指名した。同局長は「ボ」次期大統領と親しく、新政権への入閣が有力視されていたが、結局、外務大臣には職業外交官が選ばれたことになる。

2. アラウージョ局長は、「ボ」次期大統領の求める外交政策に親近性を有している。「ボ」は選挙時から「イデオ

ロギー的なバイアスの無い外交政策」を掲げていた。アラウージョ局長の外相指名に際しても、「(アラウージョの)任務はイデオロギー的バイアスを排除し、外務省のモチベーションを高め、世界全体との取引機会の拡大を図ることにある」と強調した。アラウージョ局長自身は、今後の外交政策について、「国益の効果的な追求に適い、全ての、特にブラジル人に恩恵をもたらすもの」として述べている。

3. アラウージョ次期外相は、自身のブログでグローバリズムを批判。また、そのナショナリスティックな著作の中では、「世界の共通利益よりも国益を優先すべき」と主張している他、「これまで、マイノリティーと社会正義の名の下に、人為的なイデオロギーによって恒久的なヒステリー状態が作られてきた」として、イデオロギー外交を否定している。

4. アラウージョ次期外相はマルクス主義を批判する。社会主義思想について、「人生のあらゆる矛盾を排除し、共産主義的社会を構築し、歴史の終焉をもたらすことを目的としている」と批判。一方、トランプ米大統領を賞賛し、「トランプ大統領は、資本主義や自由民主主義ではなく、各国の象徴的な過去・歴史・文化に根差した西側ビジョンを提示している」と描写している。次期政権による通商政策は、資本主義国家との関係を拡大し、社会主義や独裁国家に対して障壁を設けるものとなる見通し。

5. ただし、アラウージョ次期外相に寄せる「ボ」次期大統領の信頼は、必ずしも伯外務省内で広く支持されているわけではない。外務省には軍隊のような階級意識があり、同局長の起用で省内に不協和音が生じている。次期外相は在外公館長の経験も無く、外務省高官であったことも無い。ただし、ある大使は、アラウージョ局長は「調整能力が高く、人や手続きに詳しく、組織間のシナジー効果を生み、即応能力を持つ」と評価している。職業外交官の立場を活かして、「即座に効率化を図ること」ができる面もあるようだ。

6. アラウージョ次期外相は、ポルトアレグレ出身の51歳で、外交官としてのキャリアは29年。文学部を卒業し、夫人との間に12歳の娘が一人。独、加、米の在外公館で勤務歴あり。2010年7月～2015年3月までは在米大使館の次席公使を務めた。米国から帰国後、2016年5月までヴィエイラ外相(当時)付の副官房長を務めた。外務省内では、地域統合、メルコスール、EU、域外交渉を担当。自身のブログのプロフィールには、「伯と世界がグローバリストのイデオロギーから解放されるための手助けがしたい。グローバリズムとは、文化的マルクス主義に乗っ取られた経済のグローバル化を意味し、基本的に、非人間的でアンチ・キリスト教的なシステムである」と記載している。

新刊書 新盤紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆ 『TEZUCOMI テヅコミ』 創刊号

手塚治虫生誕 90 周年記念のマンガ書籍であるが、手塚作品群のエッセンス（「ブラック・ジャック」、「火の鳥」、「鉄腕アトム」から 1 話ずつ）に人気作家たちの新作群が加わり、その最終章といえるのが、手塚プロダクション（企画）とマウリシオ・デ・ソウザ（漫画）の「夢の共演」である「プリンセスナイト」である。手塚治虫とマウリシオとの緊密な交友関係の成果が 30 年後に具体化したものだ。これも日伯文化交流の一環である。

（マイクログマガジン社 2018 年 10 月 418 頁 880 円＋税）

『ブラジルの同性婚法』（マシャード・ダニエル著）

副題が、判例による法生成と家族概念の転換。東京大学大学院博士課程の著者による、ブラジル同性婚法の考究だ。ブラジル法体系の特徴をおさえた

うえて、顕在化した現象レベルでの同性カップルの法的承認の過程を分析し、ブラジル家族法と日本法に共通する現代家族法の展開を探求する力作である。ブラジル家族法の変容と 2011 年連邦最高裁判決の意義と限界を再検討しているが、法曹界をケーススタディーしたブラジル社会論とも読める。

（信山社 2018 年 5 月 312 頁 6,800 円＋税）

『マクナイーマ 誰でもない英雄』（マリオ・ジ・アンドラーヂ著、馬場良二訳）

モデルニズモと称されるブラジル文化ナショナリズムを宣言する文学作品だ。既に福嶋伸洋訳（松籟社、2013 年）が刊行されているが、今回は馬場教授による新訳。主人公マクナイーマが 6 歳になって初めて発したコトバは、福嶋訳では「ああ！めんどくさ！...」だが、馬場訳では、「アア！かったるい！...」となっているが、ブラジル性を代表するキャラクターのキーワードだ。新しい訳文でブラジル文学の佳作を再読するのもよし、だ。

（トライ社 2017 年 2 月 255 頁 1,800 円＋税）

◆◆◆◆◆ 新盤紹介 ◆◆◆◆◆ 『エチ・モッタ クライレリオン・オブ・ザ・センシス』

MPB を刷新しているシンガーソングライターは、ティム・マイアの甥にして、世界中のレコードを収集するコレクターでもある。吸収した世界の音を巨体に反映させながら、ジャズ、ロック、ファンク、レゲエ、クラシック、ボサノヴァといったジャンルを越境した活躍を続けるモッタの最新アルバムは、米国西海岸の音楽世界への憧れをみせてタイトルも英語（“様々な意義の尺度”の意）だが、これも間違いなくブラジル音楽である。

（PCD-24767 P-VINE 2018 年 9 月発売 2,400 円＋税）

『アクレシアボンテンポ 真夜中のため息』

父親がブラジル人、母親はアメリカ人の娘として米国で生まれリオで育ったアクレシアは東京の高級ホテルでも長期間ジャズ歌手として活躍したこともある若手シンガーだ。デビュー 10 年の最新アルバムのタイトルは”Suspiro”（ため息）となっているように、英語でもポルトガル語でも自在に歌う。現在はニューヨーク在住だが、リオ～ニューヨーク～東京と国境を越えて活躍する歌姫のファンは日本でも急増中だ。

（RPOP-10026 コアポート 2018 年 11 月発売 2,037 円＋税）

!! 「びっくり豆知識」!!

カルロス・ゴーン逮捕、悪いのはカネだ

カルロス・ゴーン日産前会長がブラジル生まれというのは知られた話である。北半球の夏休みにはブラジルに住む親の家に帰省することがあったそうだ。

レバノンからブラジルに移住したゴーン一家はボリビアとの国境近く、 Rondônia 州に住みついた。祖父と父は農産物売買に従事する。そこで生をうけたカルロスは幼少期に母親とともにリオに移り、そこからレバノンへ「逆移民」、そしてフランス移住。まさしく「流転の人生」だ。20 世紀初め宗教対立の激しい中東レバノンからブラジルに逃れる人が増え、現在は本国の 420 万人を上回る 700 万人が住んでいるという。19 年 1 月に退任するテメル前大統領もレバノン移民 2 世だ。

日本で逮捕されたゴーンは何をしたのか。日仏首脳会談の議題になるほどの国際的大事件だ。日本の東京地検特捜部は 50 億円の役員報酬過少申告、子会社を通じた経費の私的流用などを罪状にしている。だがその前に、彼は数々の「善行」と思える功績を残しているのも事実。

ルノーから倒産寸前の日産に乗り込み、思い切ったリストラと複数工場閉鎖を断行、日産の業績を V 字回復させた。

ブラジルには 80 年代に南米ミシュランの責任者として里帰りし、経営を黒字化した。そして日産に移った後の 2014 年、巡りあわせのように初の工場進出に出くわす。リオデジャネイロ州レゼンデ工場で「マーチ」「キックス」などの生産を開始し、

直近の生産シェアを 9 位の 4.4% に乗せた。ブラジルの自動車業界は GM、フィアット、フォルクスワーゲン、フォードの欧米系 4 社の生産シェアが皆 10% 台という乱戦状態。トヨタでさえ 6 位の 7.7% だ。そんな激戦の中では健闘といえる。

だが、そんな「神様ゴーン」が日産でカネに目がくらんで罪を犯した。「善人」と「悪人」は紙一重、と子供に教えるか？ それともやはり悪いことは悪い、と勧善懲悪を貫くか？ そこに「司法取引」という罪状逃れの裏技が加わってくると、現経営幹部を含め、誰が「善人」か「悪人」か、推理ドラマのようにわからなくなる。久しぶりに人間の善悪とは何か、を考えさせられる事案である。

ブラジル国内でもゴーンと同じように「善人」か「悪人」かわからないまま、批判されているケースもある。ボルサ・ファミリアなど「良いこと」をしたのに収賄罪で逮捕されたルラ元大統領。何の罪を犯したか一般には不明確のまま国会で弾劾されたルセフ元大統領。ただ共通しているのは、すべて巨額のカネがからんでいることだ。

しばし考えた末、行きついたのがムヒカ元ウルグアイ大統領の国際会議の演説である。「世界で最も負しい大統領」と言われたことがあるが、彼の信念は、人間にとって重要なのは「カネを儲けることではなく、幸せと感じるかどうか」だという。至言である。(W)



価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000 円/月（税別）

CRONICA (クロニカ)

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000 円/月（税別）



有限会社イスパニカ

〒107-0052
東京都港区赤坂 2-2-19
アドレスビル
Tel. 03-5544-8335
Fax. 03-5544-8336
Email: hola@hispanica.org

通訳・翻訳、語学研修もっております

「イスパニカ」で検索!



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内 イベント参加のお申し込みは、協会HP 専用フォームにてお願いします。

2/6 ランチョン・ミーティング
三浦 左千夫 長崎大学客員教授
演 題：半世紀に及ぶ南米風土病研究とその予防活動(仮題)

日 時：2019 年 2 月 6 日(水) 12:00～14:00
参加費：会員 2,500 円、非会員 3,500 円
場 所：シーボニア・メンズクラブ
住 所：千代田区内幸町 2-1-4 日比谷中ビル 1F
アクセス：地下鉄「内幸町」駅下車 2 分、「霞ヶ関」駅下車 2 分
※約 1 時間のご講演の後、先生を囲んでのbuffet方式(着席)でのランチとなります。

【予定】
2/25 講 師：山田 彰 駐ブラジル大使
演 題：ボルソナーロ新政権の発足と最近のブラジル情勢について(仮題)

日 時：2019 年 2 月 25 日(月) 15:00～16:30
参加費：個人会員 1,000 円、法人会員 2,000 円、非会員 3,000 円
場 所：追って連絡します

3/9 ブラジル 駐在員家族(駐在妻)のための
渡航前セミナー

日 時：2019 年 3 月 9 日(土)
1 部/ 9:15-12:30 (子帯同なし/3 時間 15 分)
2 部/14:00-18:00 (子帯同あり/4 時間)
参加費：会員(配偶者含む)3,500 円、非会員 4,500 円
場 所：日本ブラジル中央協会 会議室
住所：東京都港区新橋 1 丁目 18-2 明宏ビル本館 5 階

2019 年 1 月 開講
ポルトガル語 冬期講座
充実した講師陣により、全 8 コース開講予定

当協会では、「楽しく学ぼう! 学んで話せるポルトガル語!」をモットーに実用ポルトガル語講座を開講しております。冬期講座は、全て秋期講座の継続となりますが、どのコースも、新規に受講される方も、大歓迎です。

- 受講料 【全 9 回】会員 22,500 円(税込) ※土曜会話クラスは 12,500 円
- 会 場 日本ブラジル中央協会 事務所 東京都港区新橋 1 丁目 18-2 明宏ビル本館 5 階
- 申込方法 協会ホームページの申込フォーム(<http://nipo-brasil.org/portugal/request/>)よりお申込ください。 ※受付は申込先着順です。

法人・個人 現会員数 法人会員 125 社 個人会員 約 390 名

新規会員募集中

皆様のご入会、心よりお待ちしております。

年会費 法人会員 1 口 20,000 円(2 口以上) お申し込みは、協会HP 専用フォームにて
入会金は不要です 個人会員 1 口 10,000 円(1 口以上) お願いします。

日本ブラジル中央協会ウェブサイト
<http://www.nipo-brasil.org>

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。事務局 E-mail : info@nipo-brasil.org





BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

2019年春
新店舗にて営業開始

brasilicagrill.com

赤坂見附店は移転いたしました。
詳細は次号、この誌面にてお知らせいたします。
ご期待ください。

39年間
南米一筋

驚き!

感動!!

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業1979年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社：ユナイテッド航空、デルタ航空、アメリカン航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、
イベリア航空、ブリティッシュ・エアウェイズ、ターキッシュエアラインズ、エミレーツ航空、カタール航空、
アエロメヒコ航空、ラタム航空、ニュージーランド航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コバ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館（東京、浜松、名古屋）の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル

(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号

社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員

TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail: info@alfainter.co.jp





鉄^{てつ}は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。
新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、
“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。
だからこそ私たちは、「鉄」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、
総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。